

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第141号

イザヤ 65:1

平成19年6月29日

〰〰

ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。すると、生まれつき足のなえた人が運ばれて来た。．．彼は、ペテロとヨハネ．．．を見て、施しを求めた。ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、「私たちを見なさい」と言った。男は何かもらえると思っ、ふたりに目を注いだ。すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」と言って、彼の右の手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどり上がってまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮に入ってしまった。人々は、．．この人の身に起ったことに驚き、あきれた．．．「イスラエル人たち、なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。アブラハム、イサク、ヤコブの神．．．私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました．．．このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全な体にしたのです．．．神は、すべての預言者たちの口を通して、キリストの受難をあらかじめ語っておられたことを、このように実現されました。そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わして下さるためなのです。このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません．．．モーセはこう言いました。『神である主は、あなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。この方があなたがたに語ることはみな聞きなさい。その預言者に聞き従わない者はだれでも、民の中から滅ぼし絶やされる。』．．この方が、．．ひとりひとりをその邪悪な生活から立ち返らせて下さるためなのです。」 使徒の働き 3章

キリスト教がユダヤ教から完全に袂たもとを分かつ前の初代教会が社会に及ぼした影響やキリストの群れの信仰生活の様子が使徒の働きに詳細に記されています。ユダヤ教の二つ目の大きな例祭の『七週(ペンテコステ)の祭り』の日に聖霊が降り注がれることによって誕生した初代教会は、使徒たちの教えの堅持、定期的な交わり、パンを裂くことに象徴される定期的な食事、熱心な祈りの集まりに象徴される、キリストを信じる者たちの群れ、すなわち、信仰の共同体でした。彼らの交わりは、神をともに分かち合う(ギリシャ語の『コイノニア』)、聖霊による交わりで、お互いの必要を喜んで分かち合う、分配の賜物に満ちた共同体でした。そこでは、使徒たちを通して神が「多くの不思議としるし」を行なわれ、癒し、奇蹟、教え、奉仕等々は信じる者に与えられた賜物でした。パウロはコリント人への手紙第一12章で、御霊(神の霊、聖霊)は一人であるが御霊の賜物には種類があると教え、知恵のことは、知識のことは、信仰、いやし、奇蹟を行なう力、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力、の九つを挙げ、ローマ人への手紙では、預言、奉仕、教え、勧め、分け与え、指導、慈善 を挙げていますが、これらは信じる者たちの上に約束の聖霊が注がれたことを証しするものでした。

当時のパレスチナは想像を絶する貧困状態にあり、キリストに従った者たちもすでにガリラヤでの生活基盤を捨てて都エルサレムに移り住んでいたので生計は決して楽ではなく、新しく加えられる信徒たちの生計をも支えていくことは大変なことでした。しかし、神に対する畏敬の念から信仰に加えられた者たちは、喜んで助け合い、神の御旨を実践したのです。「七年の終わりごとに、負債の免除をしなければならぬ」ことをモーセに与えられた掟に定められた神は、隣人や兄弟たちから神が免除を布告されたものを取り立ててはならない、「そうすれば、あなたのうちには貧しい者がなくなるであろう．．．あなたの兄弟のひとりが、もし貧しかったなら、その貧しい兄弟に対して、あなたの心を閉じてはならない。また手を閉じてはならない．．必ず彼に与えなさい。また与えるとき、心に未練を持ってはならない。このことのために、あなたの神、主は、あなたのすべての働きと手のわざを祝福して下さる」(申命記15章)と、愛の施しを奨励されたのでしたが、信徒たちは聖霊に導かれるままに、愛の実践をし、異邦人を含め、すべての民に好意を持たれたのでした。彼らにとって、約束された『主の再臨』はもうすぐでも起る神のご計画の大イベントで、主の日の到来にまっすぐ目を向けて、み言葉の実践に励んだのです。エルサレム神殿では、一日二回、明け方と第九時(午後三時)に、いけにえをささげるのが常で、熱

心なユダヤ教徒は祈りにやって来て、祭司の祝福を受けたものでした。二人の使徒も宮に上ったとき、門の所で施しを求めていた足のなえた人に呼び止められます。ペテロは彼を見つめたとき、おそらくその人に信仰があるのを見て取ったのでしょう。「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」と命じ、その人はたちまち癒されたのでした。この世の金銀にまさるのが、神が与えてくださる『救いの賜物』で、癒しはその証しでした。後にパウロがルステラで、同じように足のなえた人に出会ったとき、パウロの話に耳を傾けたその人に「目を留め、いやされる信仰があるのを見て」（使徒の働き 14：9-10）命じると、彼は飛び上がって歩き出したとありますから、個人の信仰告白が記されていないなくても、使徒たちは癒しを求めた者たちの中に信仰があるかどうか、すなわち、キリストの救いに与りたいと求める心があるかどうかを霊的に見分けていたようです。

ペテロは、「ナザレの」とイエスの郷里をはっきり語ることによって、「癒し主」が自分ではなく、あの十字架上で亡くなられた後、甦られたユダヤ人イエス・キリストであることと、イエスが地上で始められたミニストリーが死後もまだ使徒たちや信徒たちを通して続いていることを、ユダヤ人たちに明確に伝えたのでした。いつも施しを求めて宮の門に座っていた人が完全に癒されて、はねたり歩き回って神を賛美しているのを見た人々は出来事に驚き、神に対する畏れからペテロのメッセージ、福音に耳を傾けます。宮の外庭、すなわち、異邦人の庭は回廊で囲われていましたが、「ソロモンの廊」と呼ばれた神殿を取り巻く回廊の中でも東の壁に沿ったところは、律法学者たちが教えたり、議論したりする場所であり、また、商人や両替人たちの商売の場でしたが、キリスト教徒たちにとっても好んで用いられた集会の場でした。今ペテロはそこに集まってきた人たちに、「イスラエルの人たち」と呼びかけ、ペンテコステの日以来人々が目撃している偉大な出来事は、イスラエルの父祖たちの神ヤーウェが預言者たちを通して語ってこられたことの成就であると語り、神がご自分の言葉、約束に如何に忠実な方であるかを今一度、ユダヤ人たちに思い起こさせたのでした。死に至るまで神に従順であったことによって人類救済のための『贖いの業』を成し遂げられたイエスこそ、イザヤがイザヤ書 52：13-53章で預言した『苦難のしもべ』であり、今や神は、しもべイエスを神の右の座へと引き上げ、栄光を与え、非常に高められたのでした。

このイエスのご自身語られたように、信じる者に「永遠のいのちを与え（る）」（ヨハネ 10：28）方であり、また、最初の復活に与った方、すなわち、「眠った者の初穂として死者の中から甦られ（た）」（コリント第一 5：20）方なので、ペテロはメッセージの中でキリストのことを「いのちの君」と表現していますが、死から甦った方は今や、信じる者を病から救ってくださる「癒し主」で、癒しの源はいのちの源、キリストご自身にあるのです。

「イエス・キリストの名によって」と、信じる者がキリストの名を語るとき、キリストご自身がこの世の事象にご介入され、信じる者を通して関わってくださり、働いてくださるので、願ったことは成就します。このようにして、癒しも奇蹟も悪霊の追い出し（除霊）も罪の赦しも信仰告白も洗礼も救いも祈りもすべて、イエス・キリストの名によって、成し遂げられるのです。信仰がなければ「御名を呼ぶ」ということはあり得ないので、ヨエルが「主の名を呼ぶ者はみな救われる」（ヨエル書 2：32）と預言したように、御名によってキリストを求めるとき、神への不従順、すなわち、聖書の語る「罪」の結果もたらされた病からの解放、癒しは来るべき世だけでなく、この世にあっても起るのです。キリストを信じる者たちの群れはいつもキリストを求め、名を呼んで、キリストの御臨在を群れの直中に体験していたので、そこにはこの世にあっても一足先に真の「神の国」が実現していたのでした。したがって、キリストが初臨（御降誕）でもたらされ、再臨で完成されることになる「神の国」とは、特定な場所とか一定の時代というより、神の支配に力点が置かれた信じる者の共同体のことなのです。まさに初代教会はこの神の国を体験していたのでした。

ペテロはさらにメッセージを続け、キリストの受難が、神が預言者たちを通して繰り返し語ってこられたように、神の初めからのご計画であり、サタンのわなに落ちて罪と死の縄目にがんじがらめに縛られてしまった人類を罪と死から解放し、永遠に生きる最初の祝福に復興させるための唯一の方法であることへと、話しを移します。ヘブル語聖書のすべての預言が指し示してきたモーセのような「ひとりの預言者」とは、アブラハムに約束された「契約の子孫（単数）」のことで、神はその「しもべ」を選び、人間史の舞台に立たせられ（ダビデの血筋の王として御降誕させられ）、アブラハムへの約束通り、最初にユダヤ人の救い（解放）のために送られたのでした。しかし、ユダヤ人は指導者をも含めすべて「無知のために」、その約束のメシヤを拒み、十字架につけて殺してしまっただけです。にもかかわらず、神のユダヤ人に対する最初の召名は変わりません。人間史のどこかで、「神の証人」としての役割を果たさなければならぬのです。「悔い改めて、神に立ち返（る）」なら罪は拭い去られると、ペテロはユダヤ人たちに促し、今福音を聞いて従うなら、神は彼らを邪悪な生活から立ち返らせてくださると、説いたのでした。

その後には、彼らに約束されてきたことがすべて成就する「回復の時」が神のイニシアティブでもたらされます。「メシヤ（油注がれた王）と定められたイエスを主（神）が遣わしてくださる」キリストの再臨に関しても、初臨と同じように、昔から預言者たちによって語られてきたことでした。キリストが昇天された後、「万物の改まる時」まで今しばらく、キリストは神の右の座に着いておられます。ヘブル語聖書が「主の日」と呼び、ユダヤ人たちが悪人の裁き、善人の救いの後始まる「来るべき世」として待ち望んできた日は、再臨のキリストの支配によって始まる時代、地上に成る「神の国」のことで、再臨の「とき」は父なる神のご計画の中ですでに定まっているので、その「とき」を善行を積み上げるとか、福音宣教を熱心にする等の人間の業によって、人間の側で変えることはできないのですが、他方で、「主の日は、盗人のようにやってきます。．．あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならぬことでしょう。そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません」（ペテロ第二 3：12）と、ペテロは、私たちの姿勢が神のタイミングに影響を与える要因となる可能性を暗示しています。福音は「ひとりひとり」の神に対する正しい姿勢を問いかけているのです。